

（西暦） 2014 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

急性期病院から自宅退院した脳卒中者の生活満足度低下に関連する要因の探索

学位の種類： 修士（作業療法学）

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 13896609

氏名：水口 寛子

（指導教員名：藺牟田 洋美 准教授）

本研究の目的は急性期病院から直接自宅退院した脳卒中患者における発症前と現在の生活満足度の比較を行うこと、および生活満足度低下に関連する要因を探索することである。平成23年4月1日から平成26年3月31日までの間に、A急性期病院に脳梗塞、脳出血、くも膜下出血の病名で入院した患者のうち、直接自宅退院した患者を対象とした。院内発症患者、重篤な併存疾患を有する患者、意識障害や認知症、中等度以上の失語症を有する患者などを除外した結果、159名が該当した。対象患者の一般情報（年齢、性別、病巣、在院日数、世帯状況など）、リハ評価内容（身体機能、高次脳機能、移動能力、ADL動作能力など）、病棟での日常生活状況（セルフケアにおける看護師の介入度）を診療録から抽出した。その後、該当患者へ質問紙を郵送した。質問紙の内容は、発症以前、退院直後、現在の生活状況や生活満足度、退院前の不安感と現在の不安解消の有無やその主要因とした。生活状況は移動能力、セルフケア自立度、家事や買い物の実施、転倒頻度、外出頻度、外出範囲、趣味活動、地域での役割、仕事の実施状況、家族および家族以外との交流頻度とした。生活満足度評価はVisual analog scaleを使用した。質問紙は88名から返答を得た（回収率55.3%、男性55名、女性33名、脳梗塞55名、脳出血18名、くも膜下出血15名、平均年齢 66.9 ± 13.1 歳）。生活満足度の記載に不備のなかった73名を生活満足度低下群（29名）と維持向上群（43名）の2群に分けた。単変量解析の結果2群間において、独居、入院時高次脳機能障害あり、外出頻度の減少、家族以外との交流頻度の減少、退院前に不安感あり、にて有意差を認めた（ $p < .05$ ）。さらにそれら5つの因子を独立変数とし、生活満足度の変化を従属変数とした場合の多重ロジスティック回帰分析（ステップワイズ法）を行った結果、独居、退院前の不安感ありにて有意な関連があった（ $p < .05$ ）。退院前不安感があったものは51名おり、その内容（自由記載）は再発（23名）、復職（18）、歩行（11）、回復の見通し（8）が多く聞かれた。不安が解消できているものは32名おり、主要因としては家族の支え（6）、自分自身の積極的な面（5）、定期的な通院（4）などが挙げられていた。独居患者や心理的に不安定な患者の場合、退院後に生活満足度が低下する可能性を考慮し、退院前に不安感を傾聴し、心理的援助や具体的な解決策の提案を行うこと、また独居患者の場合は非同居家族に対して援助を求めることや地域資源による見守りシステムの構築が必要であることが示された。